

「今、私の晴雨計は！70」

「私の将来―繋がるということ」

平山征夫

私の未来はもう多くはない。過去、現在、未来という時系列的で

いう未来は残り寿命と同義だからだ。でもその具体的生き方を表す将来となると微妙だ。残りの時間をどう過ごすかで違ってくるからだ。時間的長さではなくその中身だからだ。多少の趣味を楽しみながら穏やかに一日一日を過ごす人生の送り方が多い。80歳から中国の砂漠に木を植え始め、93歳までに四〇〇万本植えた遠山正瑛さんのような最後の人生の送り方は例外だろう。三六五日中三〇〇日砂漠にテントを張って、一日10時間ポプラの苗木を

ひたすら植え続けたというから

すごい。「四〇〇万本、世界で

一番木を植えた男」宮脇昭さんも

90歳過ぎて車いすながら元気で

植樹イベントに出ておられる。

残された私の未来をどんな将来

来図で埋めようかは決めていない。

気力、体力、財力、知力などに

左右されるだろうが、何より大

切なのは将来への“夢”を描く

だけの精神の若さを持っている

かだ。ほっておけば楽な方に流れ

たがる自分の性格はよく知って

いる。この晴雨計でも学長として

卒業生に伝えた言葉をまとめた

際に紹介したが、サミエル・ウル

マンの「青春とは」の言葉は、今

私の人生の最終段階で私自身に

問いかけてくる。

青春とは 真の青春とは

若き 肉体のなかに ある

のではなく若き 精神のな

かにこそある (中略)

臆病な精神の中に 青春は

ない

勇気と冒険心のなかにこそ

青春はある

臆病な二十歳がいる すで

にして老人 勇気ある六十

歳がいる 青春真っただな

か 歳を重ねただけでは

人は老いない 夢を失った

とき はじめて老いる

(中略)

誰にとっても大切なもの

それは 感動する心

次は何が起ころうだろうか

眼を輝かせる 子供のような

好奇心 胸をときめかせ

未知の人生に 挑戦する

喜び (以下省略 自由訳新

井満)

そうなのだ、いくら短くても未知

の人生なのだ。それに挑戦する勇

気、感動する心、子供のような好

奇心は何歳であろうと大切な

だ。そこではと思った。孫のこ

とだ。母親である娘が海外に仕事

で出かけたため、3月上旬預かつ

て二週間ほど4歳半の男の子と

一緒に過ごした時のことが思い

浮かんだ。我が平山家唯一の大事

な孫なのだが、この歳で孫と遊ぶ

ことになろうとは思ってもいな

かった。この上ない至福のひと時

だったが、男の子の結構激しい遊

びについてゆくのは、体力的に結構大変だった。それ以上に同じレベルで遊び相手になれる精神的若さ、とくに新鮮で柔軟な空想力がないとダメなことを悟らされた。市の運営する「子ども広場」に連れてゆき隅の椅子に座って本でも読んで二〜三時間見れば保護者の役割りは果たせると思っていたら、この感染症騒ぎで広場は閉鎖となって仕舞った。それで家で相対で遊ぶことになったのだが、とにかく元気が良い。こっちはソファに座って絵本でも読んで済まそうかと思うが、二冊くらい読めばもうじつとしていない。「大パパ(我が家ではおじいちゃんとは言わせない)！おうちごっこしようよ」とくる。部

屋にある色々な物を組み合わせで自分の家を造る。「車で本屋さんとスーパーに行こう」となり、部屋を運転する格好で動き回る。「本とCDを買ってスーパーではパンと野菜を買うよ」となる。そして口からは次々と創作ストーリーが続く。負けじとこちらも参加する。「イチゴケーキも買おうよ!」。するとそばから妻が「糖尿病なの!」と現実的な批判を入れる。子供の遊びの世界に戻ろうと「今日は郵便配達やさんごっこをしよう」と言えば、嬉しそうに「いいねー」とくる。絵を描いてもそうだ。落書き帳を一冊与えたとあつという間に書き潰す。それも独り言を言いながら考える様子はなく、いきなり鉛筆で線を

引いて色をつけてゆく。聞けばワニだったりキリンだったり、はたまたマシオンだったり水族館だったりする。ストーリーを話しながら迷いなく書き続けるのには正直驚く。何処にこれだけの想像力が秘められているのかと不思議に思ってしまう。これほどだったか、やはり娘もその頃には休みなくしゃべっていた時期があった。おうちづくりでも孫に負けじと「ここには屋根をかけ、車庫も用意しよう。ワンちゃんは玄関でどう」と提案すると、また「いいねー」が来る。極めつけは「大パパの家は新潟だよ。ぼくの家はオーストラリア」といきなりなる。四歳半の少年の世界と一緒に暫く遊泳した気分は爽快だった。

父が亡くなった時、母は病院だったし、兄と妹はパリとホノルル在住だったので、葬儀までは父の遺体と私は葬儀会場の一室で夜を明かした。夜中から雪が降り出した。そばでいつもと表情はあまり変わらないが、口を利かなくなった父が寝ている。私は音のない世界で思い出せるだけの父のことを遡って頭に思い浮かべてみた。ワイズミュラーのターザン映画に連れて行って貰ったこと、小六の時、町内運動会の親子リレーで一等になったこと、郡市中学校野球大会の決勝で敗れた時、私以上に悔しがっていたこと、大受験に失敗した時「浪人してもいいぞ」と言ってくれたこと、など……。子供の頃の思い出が

圧倒的に多かった。そして「親父さんにそっくりになってきたねー」と言われるようになってきたことも思い出す。そうしているうちに思い当たった。「こうやって父から、ずっと繋がってきたんだ」と・・・。生きた時代も育った家庭も受けた教育も違うが、父たちはそれを宿命として受け入れ、伝えたのだ。私もそれを受けて繋がってきたし、そうやって「生かされてきた」のだ。私たち夫婦も二人の娘に伝え、さらに孫に伝えてゆくのだ。孫から先どう伝わるかは不明だが、繋がってゆくのが人の営みなのだ。出来れば多くの曾孫に伝わることを願うが、それは孫の運命次第だ。繋がっていると

の将来ともいえる。だったらサボらないで真剣に一緒に遊ぼう。少しでも今から繋がりを増やしておこうと思った。見ることは出来ないが、「沢山繋がった私の将来」を孫が自然に受け入れて歩んでくれたらどんなに嬉しいか、「後よろしくな。大パパも残り将来を一生懸命生きるから見てろよ」と心の中で叫んでみた。「90歳で孫はやっと20歳か」と思うと「長生きしなくちゃ」とつくづく思う。父の遺体と一緒に過ごした翌朝は、真っ青な冬の青空が広がっていった。新雪を踏み分けながら、朝食を買いに近くのコンビニに行った。真っ白な米山が輝いていた。忘れられない時間だった。いずれ娘や孫とも同じような時間を持

つのかもしれない。その時は口を利かぬ存在になっている私の傍らで繋がっていることを感じてくれるだろうか・・・。  
藤沢周平の小説に「三屋清左衛門残日録」がある。彼の代表作だ。東北の小藩の用人を辞し息子に家督を譲った清左衛門の隠居生活を描いた小説、だから人生の残りの日々の記録という意味で「残日録」というタイトルをつけたと  
思っていたが、お家騒動、権力争いに巻き込まれたりで隠居にしては忙しい。時代小説だからそうなのだろうが、その意味が「日残りテ昏ルルニ未ダ遠シ」であると記されていた。いつか随筆の執筆を再開するとしたら私の場合どちらの「残日録」になるのだろう。

5年の長きに亘ってお付き合いいただき感謝します。  
只々思いつくテーマを自分で勝手に書き連ねてきました。  
読み手はその勝手な思いに加え、後半は下手なイラストまで押し付けられ随分迷惑だったろうと思います。あつという間の5年でしたが、世の中も私自身も確実にその分時は刻まれました。「時は確実に残酷」ですね。生きた証にこれから出版作業に入ろうかと思っていますが・・・。  
29年前の「晴雨計」の最終回、四年前「晴雨計その後」の最終回、いずれも四月の桜吹雪の頃でした。「ユーフオリア」（至福）というタイト

ルどうり春の宵のんびり帰  
ろうかという雰囲気でした  
が、今回は桜が咲くのも随分  
早いですが、コロナ騒ぎの真  
っ只中での春です。回を追う  
ごとにユーフォリアは遠ざ  
かっていきます。

茨木のり子の詩「桜」にある  
ようにあと何回桜を見るこ  
とになるかわかりませんが、  
桜吹雪の春の宵が本当のユ  
ーフォリアになることを祈  
って取り敢えず消えること  
にします。サヨナラ！

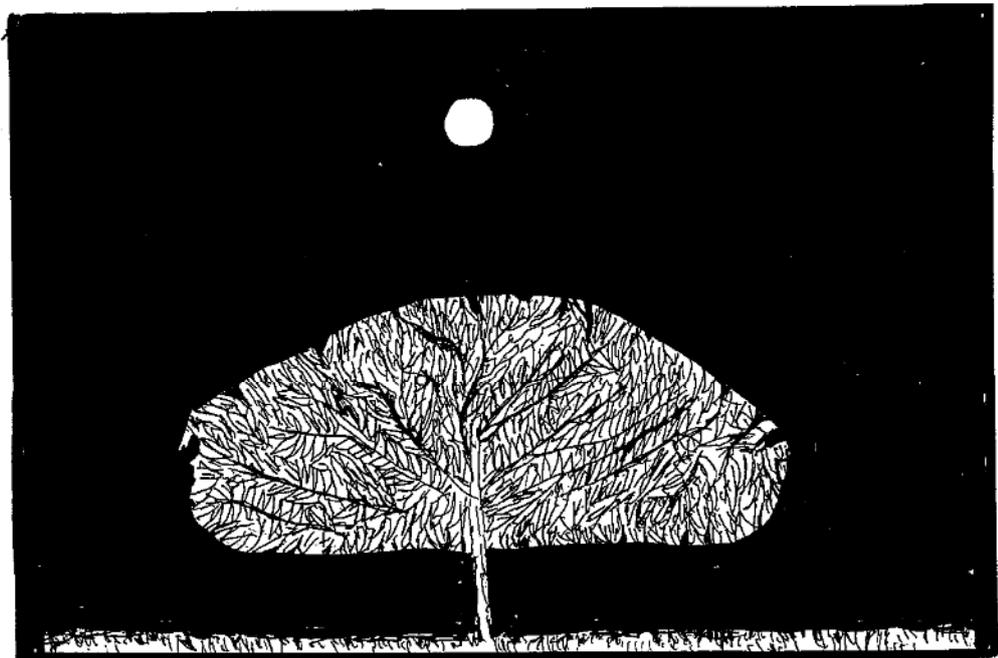
何かあれば、以下のメールアドレス  
に下さい。

• hirayama@nuis.ac.jp (大学)

• i-hirayama@nifty.com (自宅)

日立のCMのような樹を描いた  
のは、孫が高く大きく伸びるより  
多くの人に木陰を与えること  
できる人間になって欲しいとの  
願いを込めたものです

(令和2年4月3日)



孫の木 紅